

第二章 生い立ち



中堀由希子が生まれたのは、一九七一年十一月十四日午前九時五十四分である。市立岡崎病院で産声をあげたときの体重は二六七〇グラム、身長五一センチで、健康状態はすこぶる良好だった。

岡崎市といえば、徳川家康の生誕地として知られる。岡崎城（天守閣は五九年に復元完成）のある岡崎公園には「東照公産湯の井戸」などもあり、今は人口三十万人を超す中核都市だが、由希子が生まれた七一年には二十万人をやっと超えていた。

父の徳幸が二十四歳、母の知香子が二十三歳の年だ。誕生祝いに買った写真アルバムには「お祝いの言葉」のスペースがあり、こう書かれている。

《由希ちゃん、パパやママの言うことをよくきき、素直な心のある子供になって、病気もせず怪我をせず、大きくのびのびとそだって下さい。大きくなったらママを助けるようになって下さい》（パパより）

《丈夫な子にそだってほしい》（ママより）

名づけるに当たって、両親は市内の易学研究所を訪れた。ここでは「仁美」と「鈴子」も候補となったが、両親は由希子を選んだのだ。易学研究所では、運勢をこう占

ってくれた。

《この生まれの子は神経の細かく働く利口な子で、よく周囲の人に可愛がられ、また他人に与える印象のよい子で表面より内心の情深くよく誰かの面倒を見るかたちあり。また衣食住にも恵まれ頭願運もあり、女子にありては良縁に恵まれる。ただし、幼少のころの熱や傷に注意してください》

どういう根拠でこうした結論になったのかわからないが、最後の《ただし》以降の部分が、やがて現実となる。

父が写真アルバムに書き込んだ「大きくなったらママを助けるように」という願いは、実は由希子が生まれることによって、早くも達成していた。

両親は職場結婚だった。大手製薬会社の岡崎工場に勤務するうち恋が生まれ、七〇年四月二十三日に挙式した。そのころ知香子はゼンソクに悩まされていた。ときには歩くのが億劫おっくうなくらいの発作に襲われていたのだ。

「女は、子どもを産めば体質が変わるわよ」

知人が、そんなことを言った。だからといって、そのために身ごもったわけではないが、由希子が生まれてから、不思議なことにゼンソクが治ってしまった。

生まれたばかりの由希子は、目がくりくりして、どういうわけか瞳が青みがかって

いた。市立岡崎病院の新生児室には、十数人の赤ちゃんがいた。母親たちはその部屋で授乳するのだが、知香子がお乳を飲ませても、由希子はすぐおなかをすかせる。

「ゆきちゃん、泣いてるわよ」

知香子は、しじゅうそんな声をかけられた。

生まれてすぐは健康そのものだったが、退院してからよく熱を出すようになった。

三九度台の熱はざらなのに、近くの開業医に連れていっても、風邪としか診断されない。風邪にしては鼻水などが出ない。病院でもらう解熱剤を飲めば、治るのが常だった。

三九度を超えるとも何も飲み食べせず、部屋でゴロゴロしているのだが、薬で三八度台まで下がると、とたんに食欲が増すといった状態が、保育園に入ってからもつづいた。保育園に入園する直前の七五年三月十日に、妹の久美子が生まれた。

三歳になった由希子が通園を始めたのは、近くの寺院が経営する保育園だ。入園前にひと悶着を起こした。

「わたしは、青いカバンがいいの。赤いのだったら行かない」

保育園では男の子は青、女の子が赤のカバンを持つ決まりになっていたが、由希子

は頑として譲らない。困り果てた徳幸は、保母に頼み込んだ。

「男の子は何色？」

園児たちは一斉に「青」と叫ぶ。

「じゃあ、女の子は？」

これまた大声で「赤」と答える。それで納得したはずだと、徳幸は赤いカバンを買って家で包みを解いた。とたんに由希子は怒りだした。

「お父さんは、わたしをだました。青いのが欲しいのよ」

泣きはしない。しっかり回る舌で親をなじるのである。怒りにまかせた由希子は、青のクレヨンを持ち出してカバンに塗りたくった。

そのころは青がとても好きだった。折り紙やクレヨンは青しか使わなくて、保母に注意された。青いゴミが落ちていると、拾ってポケットに入れたりするほど徹底していた。

入園したてのころだったろうか、自宅のすぐ前のマンションに住むある母親が、自転車走らせて我が子を探していた。由希子に、乗せてやるといふ。荷台に乗った由希子は、車輪のあいだに足をはさんでしまい病院通いとなった。そのときの言葉が面白い。

「わたしはいいって言ったのに、おばちゃんが乗せてあげるっていうもんだから乗ったのに、それでケガをしちゃった」

その母親は恐縮しきりだった。

## ■火傷と髄膜炎

三歳の初夏、由希子はハシカにかかった。保育園の年少組のころだ。母が歯医者に行っているあいだに、父が即席麵をつくってくれた。熱湯をそいで数分待つあいだ、テーブルの上に置いてあった容器をひっくり返してしまったのである。

急いで外科医院で治療を受けたが、そのときの火傷の跡はずっと左腕の内側に残っていた。両親は、名づけるときに見てもらった運勢がよみがえったらしい。

高熱に襲われたのは、火傷がまだ癒えなかったころだ。四〇度五分にもなった。近所の小児科に連れていかれたが、高熱が五日間もつづいた。そのあと市立病院で診断を受け、やっと無菌性の髄膜炎と診断された。

二週間の入院のあいだに、薬の副作用ですっかりおなかがふくらんでしまっていた。

これ以降は割と熱を出さなくなった。発熱したり、身体がだるくなったりするのは、遠足など野外で長時間を過ごしたときに、ほぼ限られるようになったのである。

年長組のとき、山口県柳井市から引越してきた玉谷香里たまたかかおりが入園してきた。両親は新聞販売店を経営している。のちに香里は、由希子が亡くなる寸前、血縁者と恋人以外でただ一人、最後の会話を交わすのだが、そうした付き合いができる仲になるなど、もちろん五歳の保育園児にわかるはずもない。が、たちまち大の仲良しになった。

そのころはといえば、ピンクレディーが大はやりだった時期だ。子どもたちは、ピンクレディーの真似をするのが大好きであった。由希子と香里が、保育園の鉄棒の前で歌っている姿が保母の目に止まった。

地元のテレビ番組に子どもたちの歌合戦があった。どうやらそこへ出演させようと考えたらしい。テープレコーダーで二人の歌いぶりを録音した。その後、応募したのかどうかわからないが、結局、二人が出演することはなかった。

保母が毎月コメントを記入する連絡帳がある。そこには随所に「おしゃべり」であることが書かれており、明るくて元気な様子が絶えず出てくる。さらに面倒みのよさは、保育園時代に原型ができていた。お遊戯会では、独特の能力を発揮した。

保育園での劇だから、主役や脇役といった分け方はない。由希子は全員のセリフを

たちまち覚えた。自宅のカーテンを閉め切って舞台の雰囲気をつくり、由希子が最初から最後まで、ほかの子のセリフを次々にしゃべっては、ひとり芝居をして見せたのである。

記憶力のよさは抜群だった。長じてからも、幼いころのエピソードをかなり覚えていて、友人たちにはしばしば披露したものだ。

得意技は「本登り」で、将来の夢を聞かれた由希子は「ももレンジャー」と元氣よく答えた。いつもお菓子を持っていて、小川由美子ら仲良したちをうらやましながらせた。

また、自己主張が強い半面、情にもろいところがあった。テレビアニメの『アルプスの少女ハイジ』を見ながら、しきりと涙を流していた。

### ■岡崎市立六名小学校

三年間の保育園生活を送ってから、七八年四月に岡崎市立六名小学校へ入学した。一年生になって半月ほどで家庭訪問があつたが、先生がやってくる時間になると、

ちよつと出てくると言つて姿をくりました。ほどなく帰宅して、「先生、なんか言つとつた?」と、心配顔で母に尋ねた。幼いなりに気にしていることがあつたのである。

「あんた、給食の姿勢がよくないっていうじゃない」

「へへへ」

笑いでごまかしたが、担任の女性教師は母にしっかり伝えていった。

給食時間になると、上体だけひねって、後ろの子の机の上に自分の給食を広げて食べるのがしょっちゅうだった。

「中堀さん、そんなに後ろを向くのがいいんなら、机ごと後ろ向きにしてあげようか」

先生はやんわり注意したつもりなのだ。むろん、そうしたいと思つたわけではない。「いやだもん、わたしはこうやって食べるのが好きなの」

言い張つてきかない。

担任もほとほと困つたのだろう。家庭訪問で告げるだけでなく、通知票にも書いた。ただ、通知票には注意点だけではない。いいところも積極的に褒めて書いてある。

《友達が多く、明朗です。お手伝いや、友達の世話をするのが好きです。よく気がつきませす》

保育園のころから持っていた「世話好き」は、その後も一貫して変わっていない。小学校の六年間を通じて、担任教師が由希子を観察して共通しているのは、ユーモアがあつて明るく、時にはけじめのつかないくらいはしゃぐ姿である。

三年生と四年生は同じ担任だったが、そのときの荻野章先生おぎのあきらは、由希子のとつ拍子もない行動にびっくりした。

放課後のことだ。荻野先生は教卓で教材の整理をしていた。教室の中には女子の児童だけが数人、片隅で何かの遊びに興じていた。

「チャンチャカチャンチャ、チャンチャンチャン」

テレビの人気番組『ドリフの全員集合』の一場面である、あの曲を由希子が口ずさむ。顔を上げた荻野先生の前で、由希子が上着から順に脱ぎ始めた。あれよあれよという間に、まさかと思つたパンツまで取り去ってしまった。

低学年のころ、教師に「性格を変えたほうがいい」と評された由希子だったが、荻野先生は母にこんなことを言った。

「わがままというのは、前後の見境もなく、やたらに我を押しとおそうとすることでしょう。でも、由希ちゃんの言うことには十分な理由があるから、自己主張が強いことは確かですが、わがままとはいえないでしょう」

友人たちには強烈な印象を残している。放課後の友達同士の遊びとなると、由希子の独壇場であつた。

保育園以来、仲のよい玉谷香里とは、家が歩いて五分と近いせいか、小学校では一度も同じクラスになつたことがないのに、お互いの自宅を行き来していた。どちらかといえば、由希子が香里の家を訪れることが多い。小川由美子もたいてい仲間入りしていた。

女の子が集まつては、人形遊びに興じることが多かつた。土曜夕方の子ども向けテレビのヒロインがエリカという名前で、だれがそれを演じるか、いつもジャンケンで決めていた。そうしたとき、由希子が独占したわけではなかつた。

その代わり、お人形さん遊びに使うストーリーは、由希子が考え出すものと決まっていた。ほとんど毎日遊ぶというのに、ストーリーはそのたびに違ったものが披露される。

それに、「お泊まり」が大好きでもあつた。至近距離にあるのに、香里の家に泊まりに行くのだ。たいていは急に決まつて、由希子は大騒ぎをしながら、バッグに荷物を詰め込む。一泊なのに、どうしてそんなに詰め込むものがあるのかと、両方の親が

いつも首をかき上げるほど、勉強部屋の引越しのように大きな荷物になるのだった。友達を大事にすることにかけて、由希子はピカ一だった。熱中するあまり、口喧嘩になることもしょっちゅうだが、翌日になればもう忘れて遊びに興じるのだった。

五年生の二学期、大の仲良しの小川由美子が、父の転勤の都合で岐阜に引越したときは、のちに本人たちが思い出しては恥ずかしくなるくらい、泣き叫んで別れを惜しんだ。由美子はさらに兵庫姫路市に転居するが、由希子との文通はずっと絶えなかった。

卒業文集は、卒業アルバム巻末についているが、そこには由希子の文章が掲載されている。自筆によるものだが、六年生にしては、丸文字ふうの整った字だ。

### 『将来の夢』

私は、スチュワードスになりたいです。そして、いろんな国へ行ってみたいです。でも、スチュワードスになるには、むずかしい訓練をして、テストに合格しないとけません。それにお父さんやお母さんが、スチュワードスになったら、外国につれて行ってね、といったので、絶対に、スチュワードスになって、他の国の空の上を、飛びたいと思います』

小学生時代の成績は、おしなべて「中の上」だったが、字やイラストのうまさ、

小学生のレベルをはるかに超えていた。とくに字は四年生のときに習字の段位を取っていたし、イラストは友達の前でサラサラと描きあげてしまう。

一方で、入学前から始めていたピアノは、左手の指遣いがどうもうまくいかない。イライラしては鍵盤に手を叩きついたりして、そのつど熱を出す原因となっていた。ピアノは中学一年生になってやめることになる。

### ■市立竜海中学校

八四年四月、由希子は岡崎市立竜海<sup>りゅうかい</sup>中学一年となった。六名小学校は、自宅から歩いて五分もあればよかったが、中学は十五分近くかかる。

中学となれば部活動が加わるが、由希子は、イトコの筒井恵美子<sup>つづい えみこ</sup>と相談して卓球クラブに入った。練習は毎日あるのだが、二人はそろってさぼることもあった。マナーもあまりよくないと注意を受け、部活のミーティングでそれが槍玉にあげられた。由希子は悔しい思いを、出さずじまいだった顧問教師あての手紙に書いた。

『先輩に『まだ反省できていないようだから、態度であらわしてください』

と言われたとき、友達を泣いたけれど、私は泣くのは嫌だったから、少しにこっと笑いました。すると先輩がにらんできました。泣くのが嫌だったら、ほぼえんではいけないのでしょうか。ミーティングのあった次の日から、私はトレーニングにはげみました。今まで指もつかなかった前屈もできるようなになったし、うで立て伏せが、今までよりもスムーズにできるようになりました。

私は、人には春のやさしさを、自分には冬のきびしさで頑張りたいと思います。《

最後の言葉を、由希子は好んで使った。

二年生に進級して、担任になった明保俊通先生を見て、由希子は「なんて胴長の先生だろう」と吹き出しそうになった。ところが厳しい。制服のポケットに差し込んでいたピンクのシャープペンシルを見つけれられ、こっぴどく叱られた。新しいクラスで初めて注意を受けたのが、由希子であった。

しかし、由希子は状況に順応しやすい。厳しい先生ともすぐ親しくなる。

「こりやあ、どえらいめんどくささやなあ」

叱られて数日後、家庭訪問用の地図を広げながら、明保先生が悲鳴をあげたのを、

由希子は聞き逃さなかった。

「六名小学校の校区だけでも、わたしが教えてあげる」

明保先生のマイカーに、もう一人の生徒と同乗して案内役に立った。途中、由希子の自宅前に車を止めさせた。

「はい、これ先生にプレゼント」

隣り合う母方の実家の寺で飼っていたクジャクの羽を、十本ほど持ってきた。

あつげらんかんとした明保先生には、なんとなく親しみを覚える。給食の時間、配膳中に必ず教卓のところにやって来て、何やかやと話しかけた。

「たまにやあ、向こうに行つて、静かにしとれよ」

わずらわしいときも、明保先生にとってはある。そのうち、今度は先生が食べ終わる時間を計るようになった。生徒が半分も進んでいないのに、もうたいらげているくらいのスピードぶりだから、由希子にとっては、からかいの絶好の材料だ。

「ワーツ、先生、きょうは新記録。三分五十秒！」

二年生のときは、あまり勉強に身を入れてはいなかった。それなのに、英語の先生が授業のたびに由希子を指名してくる。

「わかりません」



質問される前から、由希子は、ふてくされるように言い放つ。同じような態度をとる生徒四人が呼び出された。

「なんで、先生の授業を聞いてくれないの？」

女性教諭が聞いてくる。

「先生が嫌いだからに決まっつとるやん」

「先生の授業、おもしろくないもん」

「授業の仕方が下手だよ」

生憎気盛りの女生徒に罵倒された先生は、とうとう泣き出した。

「泣いたって知らんわ」

由希子たちは、捨てぜりふを残した。そんなこともあったから、転入生には由希子が「怖い子やなあ、不良みたい」と見えていたと、あとになって聞かされた。

三年生に進級するとき、生徒はばらばらになったのだが、由希子が入ったクラスの担任は引きつづき明保先生だった。

竜海中学では複数担任制をとっている。三年の副担任になった梅村弘美先生は、この年に別の中学から転任してきた。前任校で七年間の教師経験はあるものの、竜海中

の生徒は大人っぽいと聞かされていたため、なじんでもらえるかどうか、非常に心配だった。

その不安を真つ先に解消してくれたのが、由希子がいる女生徒グループだったのだ。とくに由希子は、梅村先生を姉のように考えていた。着任した四月に、梅村先生はまだ二十九歳だった。

学校では『生活の記録』というノートを、全校生徒に配布している。普通のノートの大きさ（B5判）だが、見開きを一週間とし、月曜から日曜までの毎日の行事、学習予定を左ページに、生活の反省を右ページに書き込むようになっていた。

六十二週分あるから、大半の生徒は年間に一冊で済む。三年生になった由希子は、このノートを五冊も書いた。初めのころは正担任の明保先生にあてて書いていたのだが、やがて梅村先生との「交換日記」のような性格を濃くしていく。

アイドル歌手の岡田有希子が飛び降り自殺したのは、新学期が始まってすぐだ。名前の読み方が同じだった由希子もファンの一人だったが、岡田有希子の自殺は「後追い」を生むなど、同世代には大きなショックを与えた。

由希子はさっそく、『生活の記録』に長文を書いた。

《私は、死ぬなんて、ぜったいにいけないと思います。せつかくさずかった

命をむだにするなんて……。どんな苦しくても、ぜったい私は死ぬのはいや。死んだら、何もかも、おしまいだもん。だから、私は、自殺する人は、人間的に弱い人だと思ふ。そんな人間にはなりたくないです。それから、岡田さんが死んだことでショックだったことは、芸能界ってはやなかで、よくお金がもうかるってイメージだったけど、現実はそのうちではなかつたのですね。それが理由で死んだのではないのだからうけど、芸能界をみざす人にとって、アイドルの死は、とてもショックが大きいと思います。私は芸能界をめざしてはいない人なので、いいけど。とにかく、命は大切ということと、夢と現実がちがうって言うイメージを受けました」

## ■ 高校入試

由希子は、高校の進学先に私立光ヶ丘女子高校を選んだ。自宅から竜海中学への距離を二倍ちよつとしたあたりにある光ヶ丘女子高は、カトリック系の高校である。入学試験の直前には、梅村先生が英語を教えてくれた。

《今まで、単願で落ちた子はいんだって、私が第一号になったら、有名になっちゃうね。そんなやあだーっ！》

入試は二月十八日だったが、直前にセントバレンタインデーがあるものだから、由希子はまだそちらに気を取られていた。

試験を経て二十日、合格していた。

《人生でさいっこ——の日！ うれしいです》

ノートには、大きな文字が躍った。

《やだっっ！ 明保先生ってばあ、生徒を信じてないね。「中堀は落ちると思っつた」なんて。自分もうーんっつて思っただけ、それなりに勉強したんだよーだっつ。でも、もう高校決まっつて「ほっ」とした。うしし……あの制服を着れるなんて。あ！ そうそう、私、テストまじめにやったよ。今でもテストの問題覚えとるもん。テストが終わったあと「こーゆー問題があったじゃん、あれってさー」とか言うと、みんな「うそー、ほんと？ そんなのあったっけ？」「忘れた」というひともいたんだよ。私はえらい、でしょ。やるときはやるのさっ。なーんてうかつたから言っつてられるのよねえ》

進学先も決まり、幼なじみでそのころ岐阜から姫路に転居していた小川由美子に、

高校について書き送った。

《お元氣しますか。私はたいへん元氣です。高校は運よく受かりました。校舎の上にマリア様の像があるというぶきみな学校です。廊下には赤いカーペットが敷いてあって、げたばこは白くてvery good。それにキリスト教の学校で、朝から晩までアーメンアーメンなんだよ。テストを受ける前もおいのりがあつたんだよ。私なんてお寺の孫なのにキリシタンになっちゃおっつてんだよ。でも神様なんて見たことないし信じてないけど、危機になると神様ってたよっちゃうんだよねえ。高校に入ったらお茶クラブに入ってがんばって、女の子らしくなるのです。英語中心の学校だから、私は英語ができないのに、ついていけるか心配だね——。ゆっこはまたまた背がのびていってしまつて、こまつています》(87年3月21日)

### ■私立光ヶ丘女子高校

進学した由希子は、女子高校特有の雰囲気、初めのうち圧倒された。

《私ね、一年C組で先生は女の人ですごくあまいので、厳しい中学生をしてきた私にはちよつとあわないなつ。クラブは茶道部、きやあ、おしとやかーってびっくりしてるでしょう。クラスではすごくおとなしいんですよ。人間変わっちゃつたつ。みんなメチャメチャ明るくて、遠くのほうから通つてののに、よく元氣あるなーって感心しちゃいます。私は自転車で学校まで二十分しかかからないけど、その他の子はほとんどは電車とバスで二時間とかの子が多いんだよ。だから、学校の帰りがいろんな道で自由に帰れて大変うれしーいっ。

入学式にはスペイン語の歌をうたつたよ。その歌は毎朝歌うんだよ。光は毎日、英語の授業があるし、宗教の時間もあるんだよ。テストばつかりあつてやんなっちゃう。それーに男もいないしねえ。くーらい高校生活で、「エンジヨイしよー」なんて先生はゆつてつけど、できるわきやない。すーい子がいるんだよ。女子ばつかりだから、恥がないんだね。スカートをはいてばーにひらいて、机の上に足のせて靴下のみつおりをなおしたりしてるんだよ。まったく、ちよつとついていけない学校だー》(4月11日、小川由美子)

しばらく様子を見ていた由希子も、持ち前の明るさと積極性は隠しようがない。

《茶道部って、週三日だと思ってたら週一日だもん、毎日がとてもひまなわったっし。もう最近はクラスに慣れて、本性まるだし。やっぱ、わたしには、おとなしいというのはいりかしら？ つくづく自分の明るさを感じるのです。話は変わって、ゆみは芸能人はダレが好き？ 私は前にも言ったと思うけど、少年隊のにつき！ 写真とか雑誌の切り抜きとか、なんでもいーでちよ、あつたら……。私のクラスはにつきのファンが多くて、だれもくれないんだよ》（4月24日、小川由美子へ）

このころは、少年隊の錦織一清に夢中で、飼っていたウサギにニシキと名づけたほどだ。中学のころから、芸能ネタにはえらく詳しい由希子だった。その後、歌手の岡村孝子の実家が近いこともあってファンの一人となり、カラオケに行ったとき岡村孝子の歌をよく歌った。

男女交際は禁止されている。しかし、年ごろの女の子ばかりだから、男の子への関心はみんなが持っている。だから「紹介」と称する、一種の儀式がはやっていた。

茶道部では、こつこつ精進するタイプではないが、器用さを発揮して、週に一回の部活を休んでも、次の週にはしっかりこなすのだ。文化祭では、茶室に客を呼び込む

役がびったりだった。茶道部の経験が、のちの留学生活で役立つのだから、人間、何がいつ身を助けるかわかったものではない。

一年生の十一月十四日、十六歳になった。担任が毎日発行した学級通信には、誕生日を迎えた生徒が感想を寄せることになっている。由希子は、こんなことを書いた。

《十六歳になりました。「おめでとう」なんて言われると、嬉しくてスターになった気分だわ。十一月十四日は私のためにある日なんだ、地球は私のために回ってくれるんだって思っちゃいます（実は、いつもそう思ってるケド）。十六歳になって、過去を振り返ってみると、いろいろあったなあとつくづく思ってしまうし、未来のことを考えてみると、夢がいっぱいありすぎて（私は欲ばりさ）何を書いていいか迷ってしまいます。

それと、自分の意見をはっきり言うこともとても大切なことだと思います。いつも自分に自信を持って、人にしぼられることなく、死ぬまで自由にのびのびと育っていききたい……というのが、今の心境です》

体調はすっかりよくなっていった。中学時代は、一学年で数日は病欠したのに、高校一年では皆勤だった。

二年生になってから、刺激的な経験がつづくことになる。

ロッテCMアイドル'88に応募したのは、初夏だった。このオーディションは、この年が三回目で、翌年の第四回グランプリに宍戸留美子が選ばれて幕を閉じた。グランプリでなく売れっ子になったタレントに千堂あきは、中條かな子がいる。

第一次の書類審査には合格した。七月におこなわれた名古屋地区の予選会に出場できたものの、それ以上に進むことはなかった。

もう一つ、学園ドラマの出演者募集もあって、それにも応募したのだが、こちらは審査日がニュージールランドへのショートステイ旅行と重なったため、出場を取りやめた。

そうしたコンテストへ応募する写真を常に心がけていて、観光地などに出かけて写真を撮る際には、必ずポーズをとることを忘れない由希子だった。

## ■初のニュージールランド……………

二年生の夏休み、由希子は高校が主催する短期の語学研修のため、初めてニュージールランドを訪れた。由希子にとって初の海外旅行である。参加生徒三十九人の滞在地

は、三カ所に分かれた。由希子は北島のニュープリマスだった。

日程は七月二十三日に名古屋空港をたつて、八月十六日に学校へ到着する二十五日間の旅行だ。初めと終わりの合わせて十日間ほどは、ほかのグループと行動を共にするから、実際にニュープリマスでホームステイしたのは、七月二十九日から八月十一日までの十三日間だった。

由希子が通学したのは、セイクレッドハートカレッジで、青木美嘉や久保由紀子くぼゆきこら九人と一緒だった。その在校生をホストシスターとして、その生徒の家に一人ずつホームステイするのである。

ところが、事前に語学研修を積んだけれど、その程度で一緒に授業を受けるのだから、さっぱりわからない。仕方がないから、最上級生が授業のない時間に利用する休憩室に、日本人ばかりが集まって写真を撮りあったり、菓子をつまんだりしていた。

「あなたたち、そんなことじゃ駄目でしょ。英語を習いに来ているのに、こんなところにはしょうがないじゃないの」

ホストシスターから注意されるのは当たり前だった。一週間を過ぎるころ、ようやく辞書を頼りにしなくて済むようになった。

《ヤッホー。ここにきて一週間が過ぎました。ここは私の予想に反して、け

っこう都会です。買い物する所もたくさんあるんだけど、時間がないのよね。こっちは食べ物すごい安いです。キウイなんて二十五個で九十円ぐらいだもん。日本で買うのはあほらしい。こっちはストッキングがビリビリでもぜんぜん平気。たまげるっ！食べ物すごい甘いからびっくりだよ。フルーチェを作っても、ぜんぜん甘くないんだもん。スニッカーズぐらい甘いのがちょうどよい甘さになってる私。それで体重が四キロも増えた。友達なんかお父さんがアイスの会社に勤めてるもんだから、一日四個くらいアイスが出るもんですごいいおこってる》(家族への手紙)

由希子はパリパリのパーマネットをかけるような一面があった。何事も、他人より早くやりたい性格が出て、ワンピースや化粧品セットなどをいち早く買い求めたあと、パーマをかけることにした。

同級生だけでなく、ホストファミリも止めたが、いったん「やりたい」と思ったら、もう止まらない。ところが、十分に意志を伝えられるほど英語が上達しているわけではないから、由希子が希望した形とは、似ても似つかぬ髪型になってしまった。まるで干からびたワカメを頭に載せている格好なのだ。

使った薬品の影響なのか、もともとアトピー性皮膚炎を抱えている肌が、ひどく荒

れた。それに、熱まで出て寝込んでしまったのである。

「そんな格好で日本に帰ってどうするのよ。バレバレよ」

青木美嘉たちが心配したが、ほかのグループと合流したときも、素知らぬ顔でとし、帰国してからホームパーマですぐ崩した。先生たちも気づいていたかもしれないが、なんのおとがめもなかった。

いろんな出来事があったが、由希子はニュージーランドが気に入った。卒業してからの留学をほぼ決めたのは、この経験があったからだ。研修参加者の文集には、こんなことを書いた。

《行く前は英語や踊りの練習のために朝早く起きるのがつらくて、何度も面倒だなあと思いました。テストでも赤点を取ってはいけなから、勉強しなくてはと思いつつ、いつものように、たいした勉強をしていなかったの、もうダメだとあきらめ半分でした。夏休み前の期末テストの時なんかは、もう頭の中は先にニュージーランドに飛んで行ってしまっって、テスト勉強どころではなかったです。

向こうの人はとても自由でした。日本みたいに、まだ子どもだからとか規則、校則といわれないからでしょう。学校の校則などの内容を教えると、と

ても驚いていました。向こうでは校則なんてないけど、自分のことは自分で責任を持つということを教わっているそうです。それを聞いてまるで日本人が、自分のことに責任を持ってない人種のように思われました」

この語学研修はその後も継続することから、学校は参加希望の生徒に紹介するためビデオを収録した。帰国する直前にホストファミリーと別れる際の情景が映っており、そこに泣きじゃくる由希子がアップで登場する。由希子の姿がビデオに撮られたのは、これが最初である。

修学旅行は十月十六日から二十日まで、長崎、熊本を訪れた。長崎の教会ではミサに参加するという、カトリック系の高校らしい行事もあるのだが、生徒の楽しみはどうしても夜になる。寄り集まって語り合うのが、何より楽しい。

騒動は第一夜から起きた。よくあることだが、部屋でお化け話に興じていたら、シスターに見つかってしまった。

「罰として、明日の朝、お祈りを五十回捧げなさい」

その程度で済んだ由希子たちはまだよかった。ほかのグループは、バッグを布団の中に入れて寝ているように偽装し、別の部屋で話に夢中になっているところを、やは

り見回りの先生に見つかり、二日目はジャージ行動をとらされるはめになった。体育の授業で着る、大きな名前入りのジャージ姿で名所を回らなければならない。

三日目の夜、由希子は命が縮むかと思った。トイレに行こうと明かりをつけた友人が悲鳴をあげた。みんな起きだしたら、なんと部屋の中にゴキブリが、しかも三匹もいるではないか。世の中で一番嫌いなものが、ゾロゾロいてはたまらない。理想の男性像の条件の一つに「ゴキブリを殺せること」を掲げている由希子のことだから、金縛りに遭ったように体が動かなかった。

勇気ある友達を持つものだと感じしたのは、修学旅行のしおりを手に、三匹とも退治してくれたからだ。ところが……。

「このしおり、誰の？ あ、中堀んだ」

由希子は、もう眠れなくなった。しおりは、捨ててもらった。

そんな調子だから、日中に移動するバスの車内では、みんな居眠りをしていった。

由希子のニックネームは「ネオ」である。ニュージージーランドでもNEOで通用してすこぶる便利だったが、その「語源」は二年生のときに好んで食べていたパンが「小倉ネオマーガリン」だったからである。

由希子が三年生に進級したとき、二年生のクラスメートはばらばらになった。三年になっての同級生は、一、二年のときと雰囲気が変わっていた。初のニュージーランドで、ニュープリマス組になった久保由紀子と青木美嘉もいて、冗談が通じ合う雰囲気があった。

『白鳥麗子でございます！』が、学校中ではやったのが三年生になってからだ。鈴木由美子が描くコミック誌の主人公が白鳥麗子だが、新書判ほどの単行本は増刷を重ねる人気で、のちにテレビドラマ化もされた。

高飛車な女を意味する流行語の「タカビー」は、この白鳥麗子の言動から生まれたといわれるが、由希子のクラスでは多くの生徒が、「わたしこそ白鳥麗子」と思い込んだ。「ホーホッホッホッホー」という麗子独特の笑い声が、教室を覆ったのである。

由希子は「麗子こそわたしの姿」と確信した。架空の人物ながら美少女の麗子は、由希子が理想として思い描いてきた生活を、コミック誌上で練り広げていた。

一人っ子のお嬢さんだし、召し使いもいる。白鳥麗子になりきってみれば、友人たちと過ごす学校生活は楽しかった。休み時間になると、いつも話の輪ができた。話し

出したら止まらない由希子が、いつも必ず輪の中にいた。同級生が持ち込んだ直径五十センチほどの丸鏡に、姿を映さない日はないのだ。

そのころの雰囲気は、卒業時の文章に見事にあらわれている。

学校新聞の「卒業生のひとこと集」では、仲良しグループがリレー式にひとことを書き連ねた。

《私と中畑って高校入るとき、お嬢様になろーねって誓いあったんだよねえ（高橋朋子）。あれから三年、朋子はともかく私はバッチリお嬢様になれたで

しょ。紀子さんなんて眼中になくなってよ。ホホホホー（中畑由希子）。冗談じゃないわよ。お嬢様ってのは私みたいなのを言うのよ。白鳥麗子なんてめじゃないわ。フン（大岩久美）。そうよね。私たちなんてかわいいから女の子に敵対意識もたれちゃったりしたもんね（牧野由佳）。私って見た目はちよつと活発そうだけど内心は真正正銘のお嬢様なのよ（竹本華奈子）。下品なのは私だけ!! 確かに私の制服は汚いわよ。カルピスだっついでついでいるわよ。だけど私こそが世界で一番お嬢様なの（小谷典子）。ざけんなよっつ!!

（一回）《

卒業文集の見開きページでは、由希子は三分の一ほどのスペースを占領して、美少



女ふう自画像の横に、次のように書いた。

《お友達の皆様へ 楽しい一年間をありがとうございました。私のお友達は何人、ひどい方ばかりでございましたけれど、根性きたえられてすっかり麗子さんできました。後半は髪をおかっぱにして紀子さんにも負けない女でした。私こそが世界一でしょう。ホホホホ——》

ひとことで表現すれば、発病前の由希子は「白鳥麗子」であった。

一学期が終わろうとするころ、廊下である先生に呼び止められた。声をかけられるだけで、身体が硬直してしまうと同級生がこぼしていたくらい厳しい先生だ。

「中堀さん、ずいぶん唇が赤いようだけど」

つい先ほど、目の前で色付きのリップクリームを、由希子が塗っているところを見ていた同級生は、自分のことでもないのに、震え上がった。

「あ、先生、これはお昼にスパゲティを食べたからなんです」

先生は何か言いたそうにただけで、そのまま立ち去った。

「中堀、すごい勇気があるんだね」

友人は感心していたが、こういうのは勇気とはちよつと違うなと思う。

九月には、父の妹の結婚式に参列するため、家族で大分へ出かけた。このときの写

真を張り付けたアルバムに、由希子はこうしたためた。

《田舎の結婚式は、ゴンドラに乗ったりしないので、ちよつと寂しいと私は思った。私は、新婚旅行はぜひエジプトに行きたい。そして、ピラミッドをバックにスフィングスの横で、ウエディングドレスを着て、ダーリンに抱き上げて貰って写真を撮り、「結婚しました」のハガキを作るのが夢である。ダーリンは和服がよい》

留学が最終的に決まった由希子は、卒業式を終えた九〇年三月、名古屋駅に近い国際観光専門学校名古屋校を学校訪問した。本当は二月に赤星理香ら三人の留学組と訪れるはずだったのが、由希子だけ都合がつかず、この日に延びたのだ。

ニュージーランドに留学する卒業生の場合、あらかじめこの専門学校を訪問して、留学後の入学を「予約」しておく。一年の留学を終えて帰国してから、改めて入学試験を受けるが、留学中の成績も加味されるため、ほぼ入学が可能になる。

由希子も、そのシステムに乗ったわけで、専門学校への入学が決まっていたわけではない。一応、外語学科を希望したが、具体的な職種を最終決定してはいなかった。小学生のときにあこがれたスチュワードスには、どういうわけか魅力を感じない。空港で搭乗客を相手にするグラウンドホステスのほうがいいかなと思っていた。



Southern Cross Language Institute) である。ここで一年間、みっちり語学を磨く。日本への電話と、水澤雅子にカウンセリングを受けるとき以外は、原則として日本語を使えない。

光ヶ丘女子高校とニュージーランドとの結びつきは、八二年から進めていたカテドラル高校での夏の短期ホームステイが始まりだ。一カ月たらずながら、参加した生徒の中に長期留学の希望が強まり、クライストチャーチ市内の女子高校で日本語指導に当たっていたジョン・クープマンが、市内に日本人向けの英語専門学校を開設することにした。

それがSCLIで、日本留学の経験もあるクープマンが理事長に就任するとともに、夫人のベギー・クープマンを校長に、八人のスタッフがいる。日本からは、原則として光ヶ丘女子高校と姉妹校である聖カタリナ女子高校（松山市）、聖家族女子高校（京都府園部町）の卒業生を受け入れる。四期生に当たる由希子が訪れたとき、光ヶ丘からの十八人をはじめ、総勢三十二人であった。

あらかじめ決まっていたホストファミリーに初めて会ったのは、五日の対面パーティーである。由希子を受け入れてくれたのは、アンブラー家だ。ホストファミリーはコンピューター・プログラマーのジョフ、マザーはクレア、二人のあいだに十二歳の

長男マイケル、十歳の長女メガン、八歳の次女ブリジットがいる。

由希子には、ほかの留学生と同じように、個室が与えられた。平屋が多いニュージーランドには珍しく、アンブラー家は二階建てで、由希子の個室は八畳ほどであった。「壁が寂しいね。そこに飾る絵を買いに行こうか」

市内のデパートに一家で出かけたのだが、由希子は革のジャンパーを手を持っていった。それを着ないまま車内に置いて買い物濟ませ、車に戻ってギョツとした。窓が割られ、ジャンパーが消えていたのだ。

「ニュージーランドは、外国の中でも日本と同じように治安がいいって聞いてたのに」

ジャンパーは、十三万円もしたものを、母に無理を言っ買ってもらったものだった。

ちよつと泣きたい気分になったが、心配をかけてもいいけない。トラブルだから仕方がないわという顔をしてほえんだ。

ジャンパーには保険がかけてあったから、あきらめられる。しかし、前日に書いた手紙を出そうと、ポケットに入れておいた。その手紙ごと盗まれたのが残念でならなかった。家族あての手紙を書き直した。由希子の手紙は、ほとんど横書きである。

《HELLO》元気にしてますか。みんなに「さしなないといけないので、汚い字になってしまっけど許してよ。今日はホームステイ2日目。ホストファミリーはすごく優しいよ。英語も辞書なしでほとんど通じるし、生活に不自由はないよ。Helenはコンピューター会社に勤めていて、けっこう偉い人みたい。海外出張とか多くて、来週もオーストラリアに行くそうです。お母さんはすごい優しくて美人で料理もGood。子供はMikeはstyだけどよく話してくれる。女の子2人はキティちゃんときキラがすごく好きなの。もちろんNZにはサンリオものは売ってないけど、Fatherがアメリカで買ってきて、それから好きなんだって。だからBagをプレゼントしてよかったよ。Bat Manの時計もよかった、こっちは今流行なのよ。お父さんもお母さんも土産はすごい気に入ってもらえた》

《こっちは、バレエと乗馬とスイミングに通うつもり。乗馬のライセンス取るんだ！ 私の部屋はねえ、すごいいいよ。このうちはちよっとRich。2階建てなの、NZでは珍しいの。1階はキッチンとダイニングとリビングと両親の部屋と私の部屋とあと1つ使っていない部屋があって、私の部屋はまた写真とって送るけど、すごいかわいい。落ち着いた花柄の壁紙に造りつけの

クロゼット（色はピンク）に造りつけのドレッサーとベッドと勉強机とたんすがある。なんかバービー人形の部屋みたい》

実際にかよったのはフィットネスクラブだ。

母の日には、日本にいる母の知香子に「母の日カード」を送った。

《こっちのお母さんは優しいけど、やっぱり日本のが一番ね。日本に帰ったらまずクリームパンを食べて、それからお母さんの作ったハンバーグを食べたいな。やっぱり日本が一番いいですよ。八月に会えるの楽しみにしてます。おばあちゃんにも来てほしいけどハチとコロがね……みんな元気でやってね。私は頑張るよ》

母の日のカードなんて、日本にいては考えられないプレゼントだ。これも異国にいるからかなと、由希子は思った。ウサギのハチと犬のコロを飼っていて、どうしても留守番が必要なため、八月に祖母が来られないことが残念なことの一つだった。

ホームシックにかかる生徒が増えてきた。五月に入って、ついに一人帰国していった。ニュージブランドに着いたときからホームシックで、とにかく日本へ帰ることばかり考えていた子だったから、そのほうがよかったのだろう。由希子にはホームシックのかけらもない。その代わり「フレンドシック」なるものに、由希子は悩まされた。日本にいるときは、友達と会話を交わさない日が全くなかったので、仲のよかった友人たちと離れていると、耐えられないような気分になる。だから、それを補うように、とにかく手紙を書きつづけた。

ボーイフレンドだった高崎直之には五月半ば、思い切って手紙を出した。それでも足りない気がする。とうとう二十二日には、国際電話をかけた。すぐに切られてしまいかと心配だったのに、直之は由希子のおしゃべりを受け止めてくれた。

日本をたつ前に電話したときには、そつけない態度をとられただけに、なんと一時間半もしやべつてしまっていた。もう、嬉しくて仕方ない。舞い上がりたい気分でも、また手紙を書いた。リポート用紙に四枚だ。

六月には何と三十通近い手紙を、日本の友人たちに出した。

そんなころに、由希子は髪の毛を赤茶色に染めた。ちょうど二週間のホリデーの最中で、ショートステイのときと同じように、染めたくて仕方なかったのだ。

ところが、日本人スタッフの水澤雅子に、学校へ呼び出された。

「染めていけないとは言わないけれど、もうちょっとなんとかならないかしら」

語学学院はじまって以来の出来事に、雅子も実のところ困ってしまったらしい。だが、ちよつと注意されたぐらいでは、由希子はめげない。

「本当はわたし、金髪にしようと思ってたんです」

「あらま、そんなのにしたら、肌の色と合わなくて、どうしようもなかったでしょう」

まあ、そうかもしれない。

「先生、約束しますけど、髪を染めたからって学校をさばるわけじゃありません。勉強は一生懸命頑張ります」

染め直す気持ちは全くなかった。

「わかったわ。でも、不潔っぽく見えないように、ブラッシングは毎日欠かさないよにね」

それなのに、あとになって元に戻したのは、同級生たちが異口同音に言うからだ。

「そんな髪の毛、中壩には、ぜんっぜん似合わないよ」

授業はといえば、月曜から金曜までの午前九時半から午後三時までだ。由希子たちにとつての楽しみは、なんととっても昼休みである。授業中にしゃべれなかった分をここで取り戻すように、由希子は実によく話した。校内では日本語が禁じられているから、英語なのだが、テストの点数はそれほどでもないのに、日常のおしゃべりとなると由希子の英語はスムーズだった。

ホストファミリーでの英語が、かなり通じるようになったのも六月になってからだ。それまでは、手振りをまじえるしかないが、由希子は全く物おじしなかった。アンブラー家には親戚や友人などの来客がかなりある。由希子は積極的に溶け込んでいった。そのように努力したというより、それが由希子の天性であった。結果的に英語力を高めることにつながっていったのである。

土曜と日曜は休みだから、このときも由希子らはかなり自由に振る舞った。ホームステイ先を互いに訪れて泊まることも多く、由希子のホストファミリーは、そうした友人たちを喜んで迎えてくれた。

《お父さんお母さんへ 元氣してる？ こんなにマメに手紙を書く娘を持つて幸せだよ。みんな全然手紙書いてないらしいもん。私は切手代すいけど、今年一年だけだし、手紙ないと寂しいし、私が返事書かなかったら相手もくれないしついで許してください。お金のこと言うと、二年前とは全然違ってモノが高い。もうお小遣いが二万しか残ってナイって子もいるしね。大変ですよ。ピンボォしてるけど、余りケチすぎるのも、せっかくNZにいるから少しは欲しいもの買いたいし、この一年しかないのに、食べたいものもガマンするなんてさみしすぎるし、かといって使いすぎると大変だし、私はほとんど切手代と写真代とパス代(四千元)で一カ月一万五千元はこれらでしよ。

Japan weekに私は小学校に日本語教えに行くの。で英語のほうはやっぱ大変で、時々なにも考えたくない——って思ったりしたこともある。学校では辞書見ずに英語で考えなさいって言われるので、日本語に訳すとき、言葉が出てこないし大変だ》(7月2日)

食事にもそう不自由しなかった。友達が、家族から送られてくる日本食をたまに提供してくれて、日本食のおいしさに舌つづみを打つことはあるけれど、ホストマザーがつくる食事はとてもおいしかった。お返しではないが、由希子も七月から毎週水曜日に、食事当番を受け持ち、日本食ふうの献立をつくったりした。

七月七日から十四日までは、フェスティバル・オブ・ジャパン（通称ジャパン・ウィーク）だった。クライストチャーチは岡山県倉敷市と姉妹都市提携をしているほどで、割と在住日本人が多い。毎年この時期に、映画上映などが繰り広げられるが、この年はとくに盛大で、倉敷の市民グループによる和太鼓打ちやタコ揚げ、さらに阿波踊りも登場した。由希子たち留学生も浴衣姿で参加した。

俳優の石坂浩二に会ったのは十二日のことだった。

「写真を一緒に撮らせていただけます？」

うなずいてくれたのに、フィルムが切れていた。サインをお願いしようとしたら、なんとペンがない。仕方なく、握手だけしてもらった。

《ご家族の皆様へ 元気にしてる？ 私は friend sick も落ち着いてまた楽しくやっています。毎日相変わらず忙しいです。Japan week は忙しくてたまらなかった。石坂浩二に会って握手したぞ!! 道路で阿波踊りをしたりした。五人の生徒がホストを替わるそうです。でも私はホストと気が合うので、みんながうらやましいと言うよ。家は楽しい。

私はここに来て日本のことをたくさん知ったみたい。日本で暮らしているとわからないこととか。あとやっぱり忍耐力がここでは必要。みんなストレスがたまってイライラしてるけど、私は割り切ることでストレスがたまらないみたい。でも体重は増えた。みんな太っているから自分が太ったことに気づかなかったけど、久しぶりに体重計に乗ってみて驚いてしまった。八月がピクというから、まあ会ってもびっくりしないようにね。そのうち痩せるって。

もうすぐ四カ月になる。あと八カ月しかここにはいられないから、今やりたいことは全部やってみたい。またNZに来たいと思うと、思う。日本は今、夏でしょ。こっちは冬。でも日本みたいに寒くない。朝は冷えるけど、夏も過ごしやすいらしいし。二十三日にスキーに行くから日焼けしそうで……。

返事ぐらいくださいよ。久美子に書かせてでも（7月16日）

八月中旬のテストを終えて一週間後、二十一日には、生徒たちの家族が日本から大挙してやってきた。ところが、同級生の家族たちがあらかた飛行機を降りても、由希子の家族は姿をあらわさない。

「ずいぶんわがままを言ってきたから、来るのをやめちゃったのかしら」

そんな不安ががすめてすぐ、両親と妹の久美子、それに伯母が、ようやくタラップ

を降りてきた。家族から離れて五カ月近く、それまで考えてもいなかったが、珍しく由希子は声をあげて泣いた。

生徒の家族は、クライストチャーチをはじめロトルア、オークランド、そしてオーストラリアのシドニーを回って二十六日に帰国していった。由希子ら生徒は、その後三十日までシドニーにとどまったが、由希子は二十九日には疲労を覚えてホテルの部屋で終日、横になっていた。

丸々と太った由希子の姿が、家族をひどくびっくりさせたが、それだけに二カ月後の発病が信じられなかったのだ。

英文日記をつけ始めたのは、四月十三日からだ。英語学習の一環だから、毎週月曜に学校へ提出するのである。

英文日記の記述には大きな特徴がある。その日の出来事もさることながら、一週間のうちに必ず書かれている内容が共通しているのだ。

「わたしは日本の友達に一生懸命、手紙を書いているのに、ちっとも返事がこない」「返事がくると、とってもハッピーな気分になる」

「買い物や銀行、郵便局に行く。ピアスやイヤリングを集めるのが楽しい」

「太ってしまって困るわ。少し老けたのかしら。ダイエットしなくちゃ」

そんな記述に挟まれて、体調の悪さがときどき顔をのぞかせる。

五月三日には医者にかかり、低血圧と貧血を指摘された。十二日には背中が痛くて、ホストマザーに医者に連れていってもらう。二十七日には目まいがした。六月には上旬に頭痛とノドの痛みがあった……といったように、体調変化も一週間にはほぼ一度は登場する。

九月十日に春学期が始まった。が、身体の調子があまりよくない。十三日に胃痛に襲われ、十四日と十七日には学校を休んだ。二十七日には頭痛があつて翌日欠席した。体調がそうはよくなっていないまま、十月十一日にバスハイキングに参加した。クライストチャーチが建設された当時の遺物や、南極探検関係の資料が展示してあるカントベリー博物館やフェリーミード歴史公園を訪れた。見学しているあいだには、自覚症状は全くなかった。

こうして、十月十八日の病名告知、入院から白血球除去と抗ガン剤投与の治療、両親の来訪、そして帰国へとつながるのである。